

### 最近の鳥学会大会風景



講演発表  
(1987年)



ポスター発表  
(1986年)



記念写真  
(1986年)



表彰 (1987年)



裏方さんの自主慰労会 (1986年)

## 最近の鳥学会大会(2)

前号で、最近の大会の盛況ぶりをお伝えしましたが、そのようすを一覧できる表をつくってみました。この内容を見て、古くからの会員の方はなつかしく、また新しい会員の方はものめずらしく感じられるのではないのでしょうか。

1970年代は東京で開かれることが多かったのが、80年代に入ると北海道から三重県まで開催地が広がっています。また会期が1日から2日に、会場が1室から2室と増えています。さらに参加者数、発表数とも増加の一途です。この発表数の増加は、それまで口頭がほとんど

開催年	開催会場	都道府県	開催日	会期	参加者数		会場数
					会員	非会員	
1970	山階鳥類研究所	東京	6月14日	1日	39		1
1971	"	"	6月20日	"	34		"
1972	"	"	6月18日	"	41		"
1973	信州大学	長野	7月29日	"	※2		"
1974	山階鳥類研究所	東京	11月17日	"			"
1975	上野動物園	"	5月25日	"	41		"
1976	山梨大学	山梨	5月23日	"	64		"
1977	自然教育園	東京	7月24日	"	48		"
1978	新潟市厚生年金会館	新潟	7月2日	"	50		"
1979	上野動物園	東京	7月14 ～15日	2日	78		"
1980	帯広畜産大学	北海道	7月23 ～25日	3日	41		"
1981	林業試験場	茨城	6月6 ～8日	"	59		"
1982	仙台市民会館	宮城	11月21 ～22日	2日	75	49	2
1983	東京大学	東京	7月17 ～18日	"	137		"
1984	三重県教育文化会館	三重	9月29 ～30日	"	81	22	"
1985	信州大学	長野	10月5 ～6日	"	87	59	"
1986	東邦大学	千葉	9月13 ～14日	"	124	65	"
1987	山梨大学	山梨	9月5 ～6日	"	122	19	"

※1 表彰の種類 学：学会賞 研：鳥学研究賞 奨：奨学賞 表：表彰状 感：感謝状

だった発表形式に、ポスターという新しい形を導入させました。その結果、興味をもった人どうしでつっこんだ対話ができるという、好ましい場ができてきました。また、特定の人にお頼りして話をしてもらっていた特別講演にとってかわるように、シンポジウムが恒例化したのも最近の大会の特徴といえるでしょう。とくに会員外の方が、シンポジウムを目的にたくさん参加されているのは、学会・学界の将来のために良い方向だと思われます。さらに、ここ数年来、アピールが決議されるようになったのも特徴といえます。まだその成果は充分とはいえないのが残念ですが。残念といえはもう一つ、開催地の西限が三重県ということです。近畿、九州で大会が開かれることが、大会関係の当面の課題といえるでしょう。

作成：黒田長久、川内博

※1 表彰(人数)	発 表 数				映画	シンポジウム (アピール) 題名	懇親 会	エク ス カー ション
	一般	特別	ポスター	フィルム				
学1) 奨2) 表1) 感1)	8	-	-	-	1	-	-	-
学1) 奨1) 表1)	7	-	-	-	2	-	-	-
学1) 奨2) 表1)	10	-	-	-	1	-	-	-
学2) 奨4) 表1)								
奨3) 感2) 表1)								
奨1) 表2)	6	2	-	-	1	-	-	-
なし	16	-	-	-	-	(臼井沼の保存)	-	-
研2) 感1)	8	1	-	-	-	-	-	-
研1) 奨1) 表1)	18	"	-	-	-	-	○	-
表(1)	21	-	-	-	-	稀少鳥類の保護	○	○
研1) 奨1) 感1)	14	1	-	-	1	生物地理学的にみた北海道	○	○
研1) 奨2) 感1)	24	"	-	-	-	森林における鳥類の役割	○	○
研1) 奨2)	36	"	○	-	-	ガン類の分類と観察 (伊豆沼をラムサール条約指 定地に)	○	○
奨1) 感1)	30	"	17	-	-	ハクセキレイとセグロセキレイ の分布と生態	○	-
なし	36	-	12	-	-	これからの日本の鳥学 (環境庁に研究機関設置要望)	○	○
奨(1)	52	-	3	3	-	特別天然記念物ライチョウの現 状と未来	○	○
感(1)	38	-	13	1	-	都市環境に生息する鳥類の生態 (三宅島の自然保護を要望)	○	-
奨1) 感2)	53	-	10	3	-	種々な自然環境における鳥類の 生息変化 (森林保全に関するアピール)	○	○

※2 空白らは不明

[発表数では不確定なものがあります]

### ● 舞台裏からみた最近の鳥学会大会

ここ10年くらいで、大会の形態がだいたいわかってきて、最近では次のような手順で大会が実施されています。

#### 〈開催地決定〉

大会直前に開かれる評議員会までに、次の開催地・会場・担当者・時期などの概要が決まり、総会時に発表される→大会準備委員会が設置される。

#### 〈会員への通知〉

鳥学ニュースで決定事項を徐々に流し、開催3～4ヶ月前ごろに「大会通知」を発送（ニュースに同封）し、参加者を募る→参加希望者は発表の有無などを記入し、大会準備委員会に申し込み書を郵送。また参加費（千～2千円）などを郵便振替で送る。不参加者は委任状を送る（ことになっているが、集まる数が少なく、総会が成立するか否か、庶務幹事が毎年頭を痛めている）。以前は宿泊の世話まで担当者でやっていたが、負担が大きいため、最近では利用しやすいホテル・旅館の案内を載せるだけで、予約は参加者が直接行なう。

#### 〈大会プログラムの作成〉

発表申込み者に対し、講演要旨集作成のための所定の用紙を送付し、回収し、大会の数週間前までには大会プログラムを参加者全員に送る→この大会プログラムは参加申込みをしていない会員でも、ハガキで申込みば入手できるので、プログラムをみて急ぎに参加できる（ようにサービスしているが利用者はあまり多くないようだ）。

#### 〈大会1日目〉

朝8～9時ごろに会場で受付。講演要旨集や領収書を渡して、9時半ごろには開会。2会場が同時進行→発表時間は15～20分。興

味のある講演を求め、両会場を行き来する会員が多い。午後3時から5時すぎまでシンポジウムを開催→非会員の参加者が加わる（ので、別途参加費をとることがある）。6時ごろから9時ごろまでは、大会参加者の7～8割が集まり懇親会→最近では立食パーティ形式が多く、フランクな話し合いの場となっている。

#### 〈大会2日目〉

朝9時ごろから2会場で発表継続。昼食後1時ごろから約1時間「総会」が開かれ、各種議決・表彰・報告が行なわれ、アピールが採択される（ことが多くなった）→総会の前後で記念の集合写真撮影（最近広角レンズを使う例が多いので、後方にならぶと顔が極端に小さく写る）。その後、ビデオ・映画などのフィルム発表やポスター発表が集中的に行なわれ、午後5時前後に閉会となる。

#### 〈エクスカージョン〉

大会3日目に実施されるが、参加者は大会参加者の2～3割程度である→東京地方の場合は適地がないため実施されないことが多くなった。全体にやや衰退気味。

#### 〈後しまつ〉

大会担当者は、近々のうちに諸経費の清算をし、会計報告を学会にしなければならない→赤字になったときには学会の通常会計から補てんされる（ことになっている）。発表者には学会誌編集幹事から講演要旨が送られるので、文に手を加えて返送。その年度の学会誌の2/3号の「会記」に大会の記録として掲載される。また記念写真は鳥学ニュースに掲載されるが、後方の人の顔が明瞭でないので検討する必要がある→この写真は担当者が実費で配布している（が、申込み者は少ないようだ）。  
(川内 博)

### ● 前号への追記

前号(№25)の記事に対して、小林英司先生から貴重なコメントがありました（電話で直接）。私の文(p.2)の最後の部分、「議論のあと……掲載してはじめて終点を迎える」のくだりについて、<単に掲載すればよいというものではなく、多くの人の批判をおおぐことが必要、しかも積極的に。そうしてはじめて、ひとつの研究のまとめとなる>という主旨でした。私もそのとうりだと思います。そもそも研究成果を公表するのは多くの人から批判されるため、批判が多ければ多いほど論文の価値が高いということもありうる、と私は考えています。そのことを明示しませんでした。誤解のないよう追記します。  
(長谷川 博)

## 日本鳥学会1987年大会をお引受けして

中 村 司

鳥学会の大会は東京近辺と地方都市とで交互に開催するようになっていきます。1昨年の評議会の折、幹事会から1987年の大会は山梨でやれませんか、という声をかけられ、その場でお引受けしました。何故なら11年前の昭和51年に一度お引受けした経験があったので、それを生かせばよいと思ったからです。

昨年4月12日の評議会で、大会の内容原案を報告し、それが承認されたので、5月1日付で鳥学会ニュースと共に大会通知と参加申込み書を会員に送りました。また森岡幹事から学会センターニュースに開催予定の概要を連絡するようとの依頼があり、直ちに予定を同センターに送りました。そのほか1986年に東邦大学で大会を主催した長谷川氏から前回の資料を、石田会合幹事から大会準備手引書とランプその他発表時使用の道具を受取りました。まもなく唐沢幹事を筆頭に申込み書が届きましたが、その後、7月末になってもあまり集まらなかったのが、参加者が少ないのではないかと内心案じました。ところがメ切間際になって毎日数通送られ、メ切過ぎる頃は数十通となり、ほっとしました。早速参加者名簿作成やプログラムを編成をして、発表予定者には原稿用紙を発送しました。

一番心配だったのは宿泊のことでした。51年の山梨大会の時は一か所で済みましたが、今回はその時の3、4倍の参加者が予定されたからです。幸い前年の国体開催の時ホテルが多く建てられたので、大学に近い10か所ばかりの宿泊所を案内し、出席者の好みで選んでもらいました。

最終的に集まった発表要旨数は講演55、ポスター10、フィルム3、シンポジウム4計72(うち2欠)となりました。51年の時は講演16のみで1会場1日半で終了したことを思うと、今回の発表は4倍にもふくれ上がったことになり、当初の予想より大規模な大会となり

ました。さてプログラム編成に当っては、関連発表をできるだけまとめるように心掛けたのですが、遠路出席された方の中には1日だけで帰らねばならなかったり、どちらかの日に発表したいという希望があったりして、発表予定を多少変更したところもありました。A会場とB会場をせわしく行き来した方もあったと見受けましたが、どうか了承下さい。プロジェクターについては、A会場ではこの会のために新たに用意したので問題はなかったのですが、B会場の方に多少クレームが寄せられたようです。不十分だったところはお詫び致します。VTR使用は1人だけで、16ミリフィルムは2人でしたが、備え付けの機器を有効に活用して頂いたものと思っています。特にキツツキの素早い摂食行動が、はっきりとモニターに撮し出された時は素晴らしいと感じました。撮影機など設備さえあれば、今後ビデオを鳥の行動学の方面に多く利用されることが研究者にとっても見る人にとっても有益だと感じました。ポスターボードは初めから利用できないので初日は山梨野鳥の会員の写真を掲げ、2日目にポスター用利用としました。縦にもなるようにして発表者の希望に合うようにしました。ただボードは借りものでしたので、すべてセロテープで貼りつけるよう願ったのですが、釘で止めた人があり、ボードにきずがついたのは残念でした。シンポジウムについては、前年が都市鳥だったので、今回は都市を除き、森林を中心とする自然環境における鳥にスポットを当て、折しも問題になっている知味と沖鶴の森林の鳥(なかでもシマフクロウやノグチゲラ)を含めた生物群集としての重要さをクローズアップさせました。

最後にアピールを採択しNHKや各新聞を通し広く報道されたことは、保護を訴える上で効果があったことと思います。アピール文

については、会頭ほか前述の方々の外に藤巻氏と竹下氏にも検討して頂きました。なお今回特別に企画した武田の社の早朝探鳥会には、野鳥の会々員のほか鳥学会員も20名近くの参加がありました。エクスカージョンは、季節から鳥が少なかったのですが、県の鳥獣センタージオラマ形式で展示した鳥獣の標本

や負傷鳥の飼育状況を見ました。その際会員からタカの飼育について示唆を頂きました。今回の大会は幹事をはじめ、参加者のご協力により成功裡に終えることができました。また地元の野鳥の会をはじめ、山梨大学生物学教室と技術職業科の皆さんにもご協力いただきました。

## — ドイツ鳥学会の大会 —

ドイツ鳥学会は、数ある鳥学会のうち、世界で最初に発足した伝統ある学会で、会誌は単に「鳥学雑誌」(今年第129巻)と名うつ。会員数は日本鳥学会とほぼ同規模である。

そのドイツ鳥学会が毎年どのような大会を催しているかを知ること、日本鳥学会の大会のありかたを考えるうえで参考になるにちがいない(もちろん、両者のあいだに歴史的にも学問的にも、さまざまな事情のちがいがあつたことを認めておかななくてはならないが)。

残念ながら、私はドイツ鳥学会の大会に参加した経験はないので、昨年の大会のプログラムによって大会の概要を紹介したいと思う。

ドイツ鳥学会第99回大会は、1987年9月22日から27日まで、ドイツ北部のハノーファーに近いヒルデスハイムの大学で開催された。日程にそつて説明すると、第1日の夕方6時から、市場にある市役所地下食堂で歓迎の夕べがある。これは懇親会にあたるだろう。第2日は朝8時15分から総会が開かれ、各種の報告がされる。総会のあと小休息があり、10時から会長の開会のあいさつ。それに続いて一般講演が始まる。この講演は関連する2、3の発表をまとめて、それらをひとつのセッションとし、その間に10分あるいは15分の小休息や食事がはさまっている。発表時間は45、30、25、20、15、10分などまちまちである。

夕方8時から80分間、小形クイナ類固有種について講演がある。これは特別講演にあたると思う。

第3日は朝8時半から一般講演、午前中に6人が発表。昼食をゆっくりとって午後2時半からポスター発表。8時からオルガン・コンサートがあり、J. S. バッハやモーツァルト、メンツァンなどの作品が演奏された。この催しの案内として、5時半からメンツァンのオルガン曲を題材にした講演が組まれた。

第4日の午前8時から9時半にポスター発表、そのあと一般講演。夕方6時半から博物館で特別展に案内される。これに先だち、ファラオ(古代エジプト王)の鳥類と題する講演がある。

第5日も朝8時半から講演発表が始まり午後まで続く。夕方5時から6時までポスター発表。夕食後の8時から1時間、ガラバゴスの海鳥保護と生態について講演がある。これと並行して教育セミナーとでも言うべき自由集會がもたれた。その発表をみると、動物園での鳥類研究、はじめての人のための鳥声探鳥会、あるいは、少年少女や生徒の学習テーマとしてみたカラス科鳥類の生活などがある。

最終日27日はエクスカージョン。4コースが用意されている。

結局、講演発表は43題(うち教育セミナー5題)、ポスター発表32題(うち4題はエクスカージョンの説明)となる。非常にゆったりとしたプログラムと言えよう(日本鳥学会とくらべると)。講演発表は自由集會をのぞき重複しないので、その気になればすべてきくことができる。そのかわり会期は長い。

今年第100回大会で、9月26日から10月1日の間、ボンで開催される。100回記念の国際的大会とし、「行動生態学」と「動物地理学と分類学」をテーマとしたシンポジウムももたれる。

(長谷川 博)



## Movement

### 国際ペンギン研究会のお知らせ

第1回国際ペンギン研究会(1st International Conference on Penguins)が1988年8月15~19日、ニュージーランドのオタゴ大学(ダニーデン)で開かれます。申し込みは3月31日までですが、出席者は100名に限定されています。案内が来ていますので詳しくは下記までお問い合わせ下さい。

〒079-01 美瑛市光珠内 専修大学北海道短期大学 Tel 01266-3-4321 正富宏之

### ワシタカ類のシンポジウムのお知らせ

アメリカ合衆国・ミネソタ大学のRaptor Research and Rehabilitation Programの主催により、ワシタカ類の国際シンポジウムが本年10月26日~29日にミネアポリスで開かれます。中国とアジアの分科会も含まれています。興味のある方には案内書のコピーを差し上げますので、本会事務所にご連絡下さい。

### アメリカの大学教育の中の鳥類学

樋口 広 芳

アメリカ合衆国はいうまでもなく科学の先進国であり、時代の最先端をいくいろいろな分野の研究が活発に行なわれています。これは日本でもだれも知っていることですが、一方、鳥類学のような伝統的な基礎科学もしっかりと根づいているということは、あまり知られていないようです。日本では、鳥類学などという学問が今どきあるのかなどと質問されることがありますが、同じ科学の先進国でも、アメリカでは鳥類学はきわめて活発に行なわれており、そのような疑問を発する人の数は非常に少ないように思われます。アメリカの鳥類学は多様かつ奥が深く、その全貌をを述べるのは容易なことではありません。ここでは、その学問が盛んに行なわれている背景の一つとしてあげられる、大学教育の中の鳥類学について、簡単に紹介しておこうと思います。

日本で鳥類学という講義のある大学が、どこにあるでしょうか？ 私の知るかぎり、ありません。私は、こちらにくるまでの数年間、横浜国大の教育学部と慶応大の法学部で、鳥の生態と行動についての講義をしていましたが、それらはそれぞれ生物学特論、自然科

学特論といった講義名のもとで行なわれていました。アメリカでは、鳥類学講義はふつうに行なわれています。主要な州立大学や私立大学の生物学関係の講義目録中にOrnithologyを見つけるのはむずかしくありませんし、かなり小さな大学でさえその講義をもっていることがあります。たとえば私のいるミシガン大学(The University of Michigan; 州立)では、Department of Biologyの講義の中にOrnithology, Birds of the Worldという二つの講義があります。これらは一応大学院レベルということになっていますが、実際には学部の学生もたくさんとっています。インディアナ州にあるEarlham Collegeは、学部教育に力を入れている比較的小規模の有名校ですが、生物学関係の講義の中にOrnithologyを含めています。また、メイン州にあるCollege of the Atlanticは、人間と科学とのかかわりを重視する学部教育に力を入れているユニークな学校で、規模は非常に小さいのですが、環境科学関係の講義中にOrnithologyを含めています。

鳥類学の講義は、主に夏期、各地の大学のBiological Stationなどが企画する野外生

物学の教育プログラム中にも、たいいてい含まれています。これら教育プログラムは、各大学が競うようにして企画する非常に興味深いもので、他大学の学生にも開かれています(ついでながら、ミシガン大の関係者にたずねたところ、希望があれば日本からの学生も受け入可能とのことでした)。これらの講義は、野外施設に一定期間滞在しながら受けるもので、学生たちの大きな楽しみの一つになっているようです。

鳥類学の講義内容は、施設のある場所の特色や教官の得意分野などによって多少あるいはかなり違っています。たとえば、ミシガンやウィスコンシンのように森林や湿地に恵まれたところでは、その環境にすむ鳥の環境選択やさえずり活動、群集構造などを調べる内容が加味されることがありますし、東部や西部の海岸地域では、海鳥の繁殖や採食生態、渡りなどが強調されたりします。いずれにしても、教室内だけの講義というのはたぶんまれで、一般的には、教室では分類、同定、体の構造などについての講義または実習を受け、野外では識別、生態行動観察、捕獲および標識法などの基礎訓練を受けます。やっていること自体、特別高等でも何でもありませんが、正確な知識と適切な観察、捕獲法とを学べるという点で、貴重なものと思われまます。

アメリカの生物学関係の講義を見て気がつくのは、生化学、分子生物学、発生学といった個体レベル以下を扱う講義と同様に、生態学、行動学など個体群生物学あるいは野外生物学の講義も充実していることです。このことからすれば、鳥類学が学部育の中にあってもそれほど不思議ではないかも知れません。しかし、そうした講義目録中に、たとえば昆虫学や魚類学、ほ乳動物学がなくとも、鳥類学があることがあります。何の講義があるかは教官構成その他によっても変化するので簡単には理解できませんが、鳥類学が個体群生物学や野外生物学の一分野として重視されていることは確かなようです。それがなぜなのかについては必ずしもはっきりしていません

が、1)鳥は観察するのが比較的容易であり、かも姿や鳴き声が美しいので、見聞きする人に関心をもたせやすい、2)個体群レベルでの研究が進んでいるので、その分野のいろいろなことを紹介することができる、という二つのことが重要にかかわっているように思われます。

学部時代から鳥類学の講義が顔を出すことからわかるように、大学院でのその分野の教育と研究もとても盛んです。いろいろな大学にいろいろなことをやっている研究者がいるので、学生は自分の関心と好みによって行くべきところを選ぶことができます(もちろん能力も関係しますが)。また、学部から大学院へ、あるいは大学院の修士課程から博士課程に進む場合、同じ大学に残るよりも他大学へ移ることを勧められる傾向があります。それは、生態分野にしても分類分野にしても、違った考えなり方法なりで研究している人のもとで経験を積むことが重要だと考えられているからです。私のいるミシガン大学動物学博物館、鳥類研究部門の院生を例にしていうと、10人ほどいる中で、学部時代からここにとどまっているのはたった一人です。

大学院での教育と研究については書くべきことがいろいろありますが、長くなってしまうので今回はやめておきます。

ところで、私の知人でコネチカット州にある Connecticut College で生物学の Associate Professor をしている Dr. Robert A. Askin が、来年の1月から半年間、同志社大学に Visiting Scholar として出かけることになりました。同志社大で彼は、日本に來ている欧米人学生を対象に講義をすることになっているのですが、彼が選んだ講義名が鳥類学でした。彼がちゅうちょすることなくそれを選んだこのことの中にも、アメリカでその学問がふつうに行なわれていることがあらわれているように思われます。ともかく、彼が講じる鳥類学は、たぶん日本の大学で行なわれる初めてのものとなるでしょう。



上越教育大学は新潟県上越市にある教育系の単科大学で、新構想大学の一つ。4年制の学校教育学部と大学院学校教育科修士課程がある。学校教育学部の方は小学校教員養成課程が中心。大学院の方は現職の教員(小・中・高校)と、教師希望の大学卒業者が来る。中村研究室へは動物の野外研究をしようという学生が来るが、領域専修コースの自然系理科に所属している。目下の所、鳥の野外研究をやってみようという学生がもっとも多い。鳥の研究では「めし」は食えないといわれるが、学校の先生をしながら、アマチュアリズムで鳥をやっいていこうという生きかたがある。これにマッチしているのが私の研究室といってよい。但し野外教育を重要視するからこそこの研究室があるのであって、鳥の研究者養成を目標としたものではない。自然に親しむ心の豊さ、野生動物に接する時の心のやさしさを持った教師像を目標としており、野生動物の研究を野外教育と結びつけて、教育活動をする信念を必要としている。しかしもちろん、ここから鳥の研究者が出ることもまた良しとして、それをさまたげるものではない。現職の教師でこの大学へ来る場合は県教育委

員会の推薦が必要。この場合は県から派遣されて来るわけで、ベテランの先生である。従って鳥を研究しつつ教育活動に生かし得る説得を十分にすることのできる人物が来る。

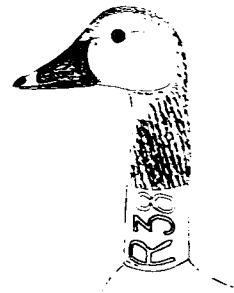
研究活動は動物の生活史または社会構造に関するもので、動物の群集構造に関するものと二つの面で行なわれている。前者の例では、現在ヤマセミとコアジサンの研究をする院生がおり、これまでにはコチドリ、シロチドリ、イワヒバリの社会構造の研究が行なわれた。また動物の群集構造では、現在都市に住む鳥の群集構造の研究が行なわれており、これまでに河川の鳥の群集構造について研究された。毎年何人かの卒論生もおり、シギ類の採食行動の比較とか、サギ類の採食行動の比較などの研究が行なわれた。また現在ではカルガモ、ハクセキレイ、カラスの鳩、ブッポウソウ目の鳥をテーマとしている学生がいる。春から夏にかけては、時間の許す限り各自のテーマで野外へ出ている。セミは秋から冬にかけて行なっている。ここに例としてあげたテーマは鳥にかかわるものだけで、もちろん鳥以外のテーマで修士論文や卒業論文を書くものもある。(中村登流)

読者の情報コーナー

● 首環をつけたオオヒシクイ  
発見のお願い

唯を保護する会ではソ連カムチャッカ州のゲランモフ博士ら(全ソ狩猟業研究所)と共同で、ガン類の標識調査を行っている。現在はヒシクイとオオヒシクイを対象としている(図参照)。オオヒシクイについては、1986年7月にカムチャッカ西海岸のマラシヨーチュノイ川禁猟区南部の湖沼で、新潟県の福島湾で山階鳥類研究所により標識された個体が1羽発見され、また同地で標識された16羽の

うち14羽が86/87年冬期に日本国内で発見されている。このことからマラシヨーチュノイ川のオオヒシクイの個体群と日本で越冬する個体群との間に強い関連があることが示唆されたので、1987年7月には同所で126羽のオオヒシクイに標識が行われた。その後これらのうちの約70%に当たる88羽が国内で発見されている(1月15日現在)。



発見場所は、北海道サロベツ原野・十勝川下流域・ウトナイ湖・能代市小友沼・宮城県内沼・山形県最上川下流域・新潟県福島潟・佐潟・朝日池・石川県片野鴨池・福井平野・琵琶湖・西池など、主に日本海側、一部太平洋側の各地。これらの鳥たちはそろそろ北帰を開始すると思われる。標識鳥を発見された方は、a)観察年月日時刻、b)場所、環境、c)首環の色と番号、d)状況(他のガンの有無、

羽数など)、e)観察者の氏名と住所、について下記までお知らせ下さい。番号不明のものや、古い記録も歓迎します。

〔連絡先〕

〒989-55 宮城県栗原郡若柳町南町16  
呉地正行 (TEL 0228-32-2004)

または

〒270-11 我孫子市高野山字堤根115  
山階鳥類研究所標識研究室

首環の番号	首環の色	文字の色	数字の色	亜種
R01-44	赤	白	白	オオヒシクイ
V35-43	オレンジ	白	白	"
V44-00	"	黒	黒	"
Y01-32	"	白	黒	"
Y49, 71	"	白	白	ヒシクイ

注1；番号の読み方は、1986年とそれ以前に標識されたもの(R01-07, V35-43, Y49, Y71)は上から下へ、1987年に標識されたもの(R08-44, V44-00, T01-32)は下から上へ(R29, R43は上から下)と読むように着けられている。

注2；日本で標識したヒシクイとオオヒシクイは黄色(A\*\*)の首環が下から上へ読むように着いている。

### ● コクガンの発見のお願い

日本へ渡来するコクガンの羽数は、つい最近まで最大1,000羽程度と考えられていた。しかし'86年と'87年の秋に北海道東部の尾袋沼と風連湖で、合計5,000羽余りの大群が地元の観察者の方や雁を保護する会会員により発見されている。これらの群れは同地では越冬せず、その後南下すると考えられる。しかし越冬期に確認されるコクガンの羽数は、1,000羽にも満たない。残りの4,000羽余りがどこで越冬しているのか不明だが、コクガンの主要生息地が海上であることを考えると、未だ観察者の目に触れずに越冬している群れがいる可能性は極めて高いと思われる。また小數羽の群れが観察されている場所では、さらに多くのコクガンが生息している可能性がある。コクガンの情報(最近および過去の)

お持ちの方ありましたら下記の点については是非お知らせいただきたい。朝鮮・中国の情報も歓迎します(これらのコクガンが日本以外で越冬している可能性もあるため)。

〔観察項目〕 a)観察年月日・時刻、b)場所、環境、c)羽数、d)観察者(氏名・住所)；

〔連絡先〕 呉地正行 (同上)

### ● オオヨシキリの情報交換を

わたしたちはチェコスロバキアのプラハ周辺でオオヨシキリの繁殖と生態の研究を続けています。日本でのオオヨシキリにも興味を持ち、文献や情報の交換を希望します。調査研究をされているかたはぜひ連絡を(英語で)。Jiří Horáček, Na okruhu 385, 14400 Praha 4 - Písnice, Czechoslovakia.

## Information

### 「日本鳥類目録改訂6版」の編集

1987年末までに目録作成のための基礎資料を収集することになっていますが、まだ資料収集ができていない所があります。ここに編集進捗状況をお知らせするとともに、さらに会員の皆さんの協力をお願いするしだいです。

#### 1)すでに資料が収集できた府県(協力者)

岩手(由比正敏), 栃木(平野敏明), 愛知(大羽康利), 和歌山(黒田隆司), 山口(武下雅文), 福岡(武下雅文), 熊本(太田真也)。

2)他の府県については、現在資料収集中ですが、次の県については協力者がまだ決まってい

#### 文献リストをお送り下さい

日本鳥学会誌で、日本の研究者の研究業績リストと紹介することになりました。これは日本における鳥学研究の現状を、国外に知ってもらおうという趣旨で始めるものです。リスト作成には藤巻が担当しますが、総ての研究業績を把握できかねますので、「日本鳥学会誌」は、「山階鳥類研究所報告」、「応用鳥学集報」、「Strix」、以外に掲載された場合には、各自のリストを、下記の要領でお送り下さるようお願い致します。

1)掲載する論文(単行本)は1987年以降に印刷されたもの

おりません。是非ご協力をお願いします。

滋賀県, 奈良県, 鳥取県, 岡山県, 香川県, 愛媛県, 高知県, 徳島県, 宮崎県

なお、稀少種については、(1)個人所有の標本による記録や各地の野鳥の会会報掲載の記録は採用しない方針であること(目録編集委員会として)、(2)詳細な記録を目録に掲載できないので、後に細かい点を確認できるように、稀少種の記録をできるだけ「日本鳥学会誌」、「山階鳥類研究所報告」、「Strix」のいずれかに短報として発表していただきたい。

(藤巻裕蔵)

2)論文の場合は、学会誌、研究所報告、大学紀要、国立・公立の研究機関、博物館などの研究報告に掲載されたもので、欧文サマリーのあるもの。

3)単行本: 筆者名、表題、発行所、発行所所在地

4)雑誌、研究報告、紀要など: 筆者名、論文題目、掲載誌、巻号、ページ、使用言語、欧文サマリーの有無

5)リストは英文で

送り先: 〒080 帯広市稲田町 帯広畜産大学 藤巻裕蔵 宛

### ——<最新刊>——

上田恵介著

イラスト: 竹井秀男

## 一夫一妻の神話

鳥の結婚社会学

この本は、著者が「野鳥」に「鳥の行動と社会」と題して2年間にわたり連載したもののうち、群れ生活に関する部分を省き、いくつかの章を加筆して、家族関係と配偶関係に焦点をあて、まとめたものです。

ご承知のように、近年、社会生物学の発展によって、鳥の行動や社会システムは大きく洗い直されています。一夫一妻の神話は崩れつつある、といえるでしょう。一夫一妻の鳥で起こる婚外交尾、他人の子育てをするヘルパー、カモメ類のメス同士のペア、子殺しなどの解明が急速に行なわれています。本書は、現在行なわれている日本を含む世界の第一線の研究の現状をわかりやすく紹介して、いま、鳥の世界で何が面白いのかをいきいきと伝えています。 ■四六判260頁/定価2800円

東京都文京区水道2-14-2-201

(03)-942-0205/振替東京3-126764

蒼樹書房

## 第1回 国際鳥学セミナーのお知らせ

第1回国際鳥学セミナーを本年10月下旬に開きます。このセミナーは、もともと外国の一流の学者との交流を通して本会会員の研究レベルを向上させようという趣旨で考えられたものです。とくに個人的な交際を深めることにより、将来は会員の英文論文の指導をしてもらいたいと考えています。それには、相手の学者に日本に来てもらい、日本の実情を十分に見てもらふ必要があります。見ず知らずの相手では、論文の校閲を依頼しても、親身になってやってくれません。

今回は、第1回の試みとして、アメリカ・オクラホマ大学のダグラス・モック教授を招へいします。モック教授は40才という若さですが、学生時代から多くの賞をとり、現在では鳥の社会生物学の分野でトップクラスの位置を占めています。野球選手で言えば現役の大リーガーという実力者で、若い人が指導を受けるのには最適任者の1人と思われます。

セミナーの内容は、大阪市大における小人数のワークショップ、東京・京都などにおける教授の講演会、および教授の時間が許せばエクスカージョンを通じての交際を考えています。詳しいプログラムは目下、私と山岸哲氏とで検討中ですので、次回の鳥学ニュースをお待ち下さい。  
(森岡弘之)

### 《1988年度大会のお知らせ》

本年度の大会は11月19・20日(土・日)に、千葉県我孫子市の市民会館で開かれます。今年とはとくにポスター発表に力を入れるとともに、シンポジウムでは水鳥に関心のある全国の研究者・観察者に集まってもらい、湖沼の現状と保護についてスポットライトをあてたいとのことです。山階鳥類研究所の吉井正・杉森文夫両氏を中心に有意義な大会にするため立案中。写真展や山階鳥研の見学会も予定されているようです。

### 《1988年度会費をお納め下さい》

本会では年会費は前納となっています。1年以上滞納しますと退会となりますのでご注意下さい。会費の納入状況は、このニュースを送付した封筒の宛名ラベルに、次のように記入されています。

- ① 会則通り会費が納められている＝ラベルに何も印刷されていない
- ② 次年度の会費がすでに払ってある＝会費収支：+ 4,000円
- ③ 会費が未納になっている＝1987年度会費未納〔4,000円〕

※詳しくは鳥学ニュース№24 p.8をごらん下さい。

### 《バックナンバーの大特売》

学会誌「鳥」のバックナンバーを販売しています。期間は本年3月31日まで。詳細は鳥学ニュース№24 p.7をごらん下さい。

なお、次の各号も若干在庫があります。91/92, 93/94, 95/96, 97/98(各3,000円), 99, 100(各2,000円)。88, 89, 90は品切れです。

《次号予告》特集「失敗に学ぶ」ご期待下さい。

## 鳥学ニュース No.26

1987年2月29日発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
(電話) 03(364) 2311  
発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷